

根を張る

浅 野 献 一

奨励者紹介〔あさの・けんいち〕

日本キリスト教団室町教会牧師

主はこう言われる。
呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし
その心が主を離れ去っている人は。
彼は荒れ地の裸の木。
恵みの雨を見ることなく
人の住めない不毛の地
炎暑の荒れ野を住まいとする。
祝福されよ、主に信頼する人は。
主がその人のよりどころとなられる。
彼は水のほとりに植えられた木。
水路のほとりに根を張り
暑さが襲うのを見ることなく
その葉は青々としている。
干ばつの年にも憂いがなく
実を結ぶことをやめない。

（エレミヤ書 17章5—8節）

根を張ることの大切さ

樹木が幹をのびし、枝葉を広げ、上に横にと成長し、実をつけるためには、それ相応の根も同時に、下に横にと広がり、伸びていかなければなりません。雨や雪、台風が来た時にも耐えられるように、根を大地に張ることは大切です。

そして人生の歩み・いのちの歩みも、やはりその樹木のあり方と同じです。

お分かりのように、樹木が高くなり、枝・葉が大きくなればなるほど、風などで横からの力が大きくなりますし、上から圧（の）し掛かる圧力、プレッシャーも大きくなります。人間も齢をとり、重い責任を負うほどに、横からの風当たり、上からの圧力が強くなります。それに耐えて倒れないように根を、横にも縦にも縦横無尽に張ることが大切です。

もし嵐が来て、葉はみな散らされ、枝の大部分がひしゃげ、折れて、無残な姿になっても、根がしっかり張っていれば、一時的に弱っていたとしても、次の年の春には、新しい枝を出し、新しい葉をつけて、新しい姿で、そのいのちを生きることが出来るのですから。

水のほとりに植えられた木

旧約聖書の舞台であるパレスチナの地方は、日本とは違い、非常に乾燥した気候です。

雨季と乾季にわかれ、雨季の降雨後は花が咲きますが、雨季が終わってしまえば、その花は「風が吹けば」すぐに枯れてしまう（イザヤ書40章6～8節）ような気候です。

赤土と石と岩の大地—ほとんど砂漠にも近いようなその地において、水というのは何より大切でした。

そのような厳しい環境で語られた言葉には、重みがあります。そこでは主＝神に信頼する人は、いのちに直結する水を得続けることのできる「水のほとりに植えられた木」と言われます。

その姿は本日の聖書箇所エレミヤ書17章6節に書かれている「荒れ地の裸の木」とは対照的です。「荒れ地の裸の木」とは、荒野の中のすなわち「死の地にある枯れ果てた樹木」です。いのち生きる水も、休む間もなく、機械的な忙しさに押しつぶされ、心も身体も疲れ果てている、現代に生きるわたしたちの姿ともダブって見えてきます。

この主に信頼する人、神にのみ望みを置く人は、すでに水の流れ、つまりいのちの水にまで根を下ろしているの、どんなに雨が降らなくとも不安さえない。過酷な灼熱の大地で、すっきりと立ち上がり、甘き「実を結び続ける」と言われます。

これだけを読むと教訓的・訓戒的で、「結局、聖書なんだから、主・神を信頼すれば良いと言っている」と納得するだけで終わりがねません。

実は、もう一つのフィルター、すなわちこの言葉を伝えたエレミヤという預言者が活動していた時代状況というフィルターをかけると、まるで3D映画を特殊なメガネで観るかのように、奥行きと厚みが増し、深い次元を感じられるようになります。

預言者エレミヤは、まさにユダという王国が滅亡に向かっていった時代に活動した預言者です。エレミヤは、「苦難の預言者」と言われるほど、神の言葉を取り次げば取り次ぐほどに、人々から憎まれ、疎（うと）まれました。特に、ユダ王国は敵に滅ぼされるという預言をしましたが、その言葉に国の指導者たちは怒り、苛立ち、市井の人々すらエレミヤを憎みました。

人間というものは、自分の罪やダメさ加減を指摘されると、悔い改め、反省するのではなく、多くの場合、怒り、その罪を告発したものを憎しみ、恨み、迫害までし始める。それがこの世界・人間の一面ではないでしょうか。

主に信頼する人は、「水のほとりに植えられた木。／水路のほとりに根を張り／暑さが襲うのを見ることなく／その葉は青々としている」と、その「苦難の預言者」エレミヤが言う時、この言葉が、単に訓戒として「『神に信頼する人』は素晴らしい・幸せになれる」と言っているのではないのです。

むしろ「主＝神に信頼する人」は、現実の人間の世界にあっては、疎まれ、信頼していた人からさえも裏切られ、はじかれていく。痛み、苦しみの内に身を折り曲げて、皆から物笑いの種にされ、渴き切ったその場所で、あえいで、しな垂（だ）れてしまうような死する状況に落とされる。その徹底した痛みや、苦しみの中—その地上はカラカラに乾いている現状・現在にあって、その根、土の下では、水に辿りつこうとして、根を伸ばしていつている。この苦難の内にあるエレミヤの姿こそが、この「水のほとりに植えられた木」の

言葉の基底に流れています。

人々から物笑いになる時。また本当のことを言って、はじかれ、脇にどけられるような時。いのちの側に立つことを堅持する時。皆と違うがゆえに色モノとみられ、用いられないような立場に追いやられる時。そして、どうすることもできないような、雨の一滴も降らないと感じる、病の苦しみの時。

実はその時にこそ、根を張っていく、むしろチャンスなのだという響き。シンドイ時にこそ生きるエール、応援をされていることを、今、この聖書に触れる時に感じます。

下に下に、広く広く、地面を押し分けて根を張ることは、本当に大変なことです。地表では用いられず、伸びることが出来ない、押さえつけられている状態。

ただ、苦しみや痛みを耐えて、じっとして動かないでいるように見えたとして、実は、その苦しい最中にこそ、表立って活動していた時には、忙しくて手につかなかったことをする「良い機会・チャンス」が与えられたと深く静かに根を張っていくこと。今まで、気付きもしなかった出会いが、そのシンドイ状況の中で与えられ、つながりを広げていく。そういう時でもあるという気付きが与えられるように思うのです。

シンドイ時に与えられた恵み

わたしは、前に働いていた教会の後半、数年間にはうつ病に徹底的に苦しめられました。「気分が落ち込む」というだけではなく、本当に「喜び」が無くなる。何も考えられない。音楽の一つも頭に浮かばない。あんなに好きだった本の、一行さえも読むことができない。そして、何もできない自分自身を「情けない」と責め続け、毛布をかぶって、一日が過ぎていく。そういう状態でした。

本当に物笑いの種でしかないような牧師。うつ病にやられ、臥（ふ）せっている、役立たずの牧師。それがわたしでした。

今、この病が寛解をしてあらためて感じることは、この病気を患ったことは、感謝であり、有り難いことだったということです。

うつ病になる前のわたしはとても傲慢でした。しかし病気になって、鼻っ柱がへし折られることにより、前よりも少しは、苦しんでいる人やできない人を責めたりしなくなった気がします。上昇志向が完膚なきまでに叩き潰され、底辺まで落ちることにより、むしろ、下で広がり、全く新しい出会いをして、つながる喜びを知りました。病むことによって、健康だったら絶対に出会わない、気の許せる仲間（僧侶の方々とも）に出会い、今も損得勘定のない、辛い時を一緒に乗り切った仲間・友達としての関係を得ています。

思わぬ困難の時、痛みの時にこそ、下に、横に、いろいろな深みと広がりをもった、「これからのいのち生きていくための根の広がり」が得られると、感じます。そして、下に伸びる時、地下に流れている、そのいのちの水・いのちの流れに届く。また横に伸びる時、容易に倒れることのないつながりを得ることができる。

粘ばる一根を張る

とある先輩の牧師の言葉が今、脳裏をよぎります。「頑張らなくていい。どうぞ粘ってください」という言葉です。

「頑張らなくていい、粘って」ということは、その牧師曰く「頑張るは、我を張るに通じてしまうから、そうではなくて、粘って、根を張ってください」という意味です。

頑張る—硬直した、ポッキリ折れてしまう—ではなくて、粘って—しなやかに身をしならせて、地面をしっかりグリップするように根を張っていくということで、頑張って、自己主張を曲げず、相手を打ち負かしていくよりも、粘って木が根を張るように黙って、広く、深く、浸透していくことの大切さを教えてくださったのだと思います。

—根を張る—

では、何に根を張るのでしょうか。痛み・病を経験したわたしには、次の聖書の言葉が迫ってきます。

あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい(コロサイの信徒への手紙2章6～7節)。

何よりも、わたしよりも、まず真実であったがゆえに、疎(うと)まれ、誹(そし)りと痛みと苦難、そして「わたしたちの病(やまい)」(イザヤ書53章4節)をその身に引き受けられたキリスト・イエスに根を下ろしていく。その死の地、「炎暑の荒れ野」(エレミヤ書17章6節)に雨降らぬ時にも、まさに「水路のほとりに根を張り」、イエスより「生きた水」(ヨハネによる福音書4章10節)をくみ取ることに、いのち生きていく道の確かさを、リアルに今、感じ、深く感謝します。

上に伸びなくとも暗きうちを下に、横に根を張ってゆく。痛む神＝キリストは、痛みながら、わたしの痛みと苦しみの中にこそ、一緒にいるという本当の「愛の姿」に生きるための水が与えられる。

最後にもう一度、エレミヤ書17章7～8節をお読みして、メッセージを終えたいと思います。

祝福されよ、主に信頼する人は。／主がその人のよりどころとなられる。／

彼は水のほとりに植えられた木。／水路のほとりに根を張り／暑さが襲うのを見ることなく／その葉は青々としている。／干ばつの年にも憂いがなく／実を結ぶことをやめない。

2018年10月24日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録